



# SEO 沖縄スペイン協会

Sociedad Española de Okinawa



## Vol.2

沖縄スペイン協会 会報第2号



沖縄スペイン協会は、スペインを愛する人スペインに興味を持つてる人が集まり  
スペインをよく知り親睦を育みながら、スペインの魅力を一緒に楽しもうという団体です  
スペイン人会員やスペインに住む仲間もいて、本国との交流もめざしています

沖縄スペイン協会では隔月にイベントを開催しています  
スペインに興味のある方のご入会をお待ちしています

- ①一般会員 入会金 2,000 円 / 年会費 1,000 円
  - ②学生会員 入会金 1,000 円 / 年会費 1,000 円
  - ③賛助会員 入会金 2,000 円 / 年会費 10,000 円
  - ④法人会員 入会金 2,000 円 / 年会費 30,000 円
- 詳細はこちらにお問い合わせください [okinawaspain@gmail.com](mailto:okinawaspain@gmail.com)

# 国際ピアノコンクールハエン賞と コンサートツアー報告

上原由記音

本年3月末から4月下旬に、私は第60回ハエン賞国際ピアノコンクールの審査員を務めてまいりました。日本を出発するときはボカボカ陽気だったのですが、到着したマドリドは異常気象で、シアラ・ネバダ(アંタルシアの連山)が雪を頂いてい

るのが見え、びっくりしました。コンクール開催地のハエン県ハエン市はマドリドより南に位置しますが、こちらも4月にも拘らず、10度を下回る寒さでした。ハエンは世界有数のオリブの産地で、オリブの木のオリブの産地で作って遠くまで山々に美しい列を作って遠くまで

並んでいます。オリブオイルには色々な種類があり、コンクール審査オフの日にオリブ工場に見学に行き、試飲して、その多彩な味を堪能しました。

コンクールは、予選から第4段階の関門があり、課題曲と自由曲を含め9曲を弾

かなければなりません。1曲の長さが40分くらいの大曲もあり、審査は何日も続き大変です。私自身はこのコンクールの審査員を引き受けるのは今回一回目でしたので、審査方法には慣れていましたし、世界から集まった審査員の方達との

交流する事ができ、自分自身にとってもプラスになりました。今回、日本からの参加は2名だけでしたが、第2予選で残念ながら落選してしまいました。1位は韓国のキム・ホンギ氏で、スペイン作品の演奏だけでなく、ショパンのピアノ協奏曲も素晴らしいです。日本人の活躍も今後期待したいと思います。

そして10月、マドリド、マジヨルカ、バルセロナで演奏旅行を行いました。マジヨルカ島のバルデモッサという村には、フレデリック・ショパンが4ヶ月間過ごしたカトウハ修道院があり、そこでも演奏しました。このバルデモッサという所は、ショパンのお陰で、現在はお洒落な観光地になっています。街路樹が立ち並ぶ石畳の道にはカフェが並んでいて、ロマネスク様式の修道院が静けさを感じさせます。とても素敵な村なので、是非、訪ねてみては如何でしょうか。

バルセロナでは、おしゃれなグラーシア通りのガウディの建築カサ・ミラーの近くにある作曲家モンボウの家で演奏し、モンボウ財団や作曲家フランカフォルトの財団の方や、ハエンコンクールの審査委員長アルベールなども駆けつけてくださいました。ツアー最後のコンサートは、世界遺産バルセロナのカタルーニャ音楽堂での演奏でした。これはムンタネルというモデルニスモの建築家がワーグナーのオペラに影響を受けて作り、舞台の壁には女神たちの像が

並んでいます。モデルニスモはフランスのアール・ヌーヴの潮流で、花や植物からインスパイアされた装飾に埋め尽くされたこのホールはとても美しいです。こんな素晴らしいホールで弾けて夢のようでした。爽やかな天候に恵まれ、気持ちよく過ごす事が出来ました。私は6日間の滞在で5回のコンサートを開催した

為、観光は出来ませんでした。マドリドでは国立劇場の総督と再会でき、また何人かの友人達とも会い、有意義な滞在となりました。この演奏ツアーは日本から聴きに行くことができ、また企画されると思いますので、楽しみにしています。ご興味のある方は、ご参加くださいませ。



写真上/ホールの写真「カタルーニャ音楽堂 舞台上でピアノを弾いている白いドレスが筆者です」  
写真下/オーケストラの写真「ハエンコンクール・ファイナルのピアノ協奏曲の審査会場」

# 「鳥の歌」に寄せて

崎山弥生

「鳥の歌 El Cant dels Ocells」は、チェロの巨匠、パブロ・カザルス(1876-1973)が編曲し愛奏したことや、1992年バルセロナオリンピックの開会式で、オペラ歌手、ビクトリア・デ・ロス・アンヘレス(1933-2005)が、カタロニア語で歌ったことでも有名ですが、もとはスペインのカタルーニャ地方に伝わるクリスマス・キャロルです。カザルスは生前、この曲に対して次のように述べています。

私は、カタルーニャの古い祝歌「鳥の歌」のメロディでコンサートをしめくくることとしています。その歌詞はキリスト降誕をうたっています。生命と人間に対する敬虔な思いに満ちた、実に美しい言葉で、生命をよくなく気高く表現しています。このカタルーニャの祝歌のなかで、みどりごを歌い迎えるのは鷹、雀、小夜啼鳥、そして小さなミンソザイです。鳥たちはみどりごを、甘い香りで大地をよるこぼせる一輪の花にたとえ

て歌います。(L.ウェッパ―編、池田香代子訳「パブロ・カザルス鳥の歌」)

1936年7月、スペインでは内戦が勃発。3年にわたる内戦の結果、1939年3月にフランシス・フランコ(1892-1975)の独裁政権が成立しました。内戦でフランコに対抗したカタルーニャは、カタルーニャ語の使用禁止などの弾圧を受け、1939年、カザルスはフランス領でカタルーニャ語の話される村「ブラド」へ亡命しました。その後彼は「スペインに自由と人民を尊重する政権が再建されない限り、チェロの演奏はしない」と宣言しますが、19

50年、パツハの死後200年祭を契機に集まった多くの人たちの熱意に動かされ、再び公の場に姿を現し世界各地で演奏し、平和活動を行いました。

1971年10月24日「国連の日」、カザルスはニューヨーク国連本部で演奏し、国連平和賞が授与されましたが、演奏前のスピーチの映像は全世界へ配信されました。

『私は公の場で長年にわたってチェロを演奏していません。しかしまた演奏すべき時が来たと感じています。』

カタロニアの民謡のから1曲演奏しようと思います。El cant dels ocells「鳥の歌」と言います。鳥たちは「Peace, Peace, Peace」(平和、平和、平和)と歌います。それはパツハ、ペートーベンそして全ての偉人たちが賞賛し、愛したであろう音楽。この曲は私の故郷カタルーニャの魂なのです。』

当時の映像を見ると、カザルスは右手を高く上げたり下げたりしながら、鳥が飛んでいるかのような動きで何度も「Peace, Peace, Peace」と繰り返ししています。「鳥の歌」は、もともとは歌詞があるにも関わらず、カザルスはチェロで…言葉を持たない「楽器」で演奏しました。国連でのスピーチは、単純に自由の象徴である鳥の歌声の擬音を「Peace」と

表したのではなく、故郷への思い、そしてフランコ政権への強い抗議の意味がありました。カザルスにとって、この曲は「カタルーニャ語では歌うことのできない歌」の象徴だったのではないのでしょうか。

国連コンサートから2年後の1973年10月22日、再び祖国の地を踏むことのないまま、96歳でカザルスはその生涯を閉じました。カタルーニャ語の自由な使用が認められたのは、フランコが83歳で病没した。1975年以降のことです。

『世界中の人々が、幸福と、美と愛する心で結ばれて、一つの大きなコンサート会場にいるかのように共に座る日待ち望んで』と、国連総会で話したカザルス。演奏活動の傍ら、常に世界平和を訴え続けたカザルス。彼が願った平和と人類愛は未だに叶えられず、今でも世界各地で紛争に苦しむ人々が大勢います。「鳥の歌」を通して、世界中の人々がお互いを認め合い、平和で幸せな時代がやってくることを願わずにはいられません。

## 『El Cant dels Ocells』

### 『鳥の歌』

En venire desuntar el major lluminar

こよなく幸せな夜 至上の光が

En la nit mes ditzosa,

輝き染める様子を見て

Els ocelllets cantant a feste jar-lo van

鳥たちは歌いながら 祝いに集う

Amb sa veu melindrosa.

甘やかな声をたずさえて

I l'aliga imperial pels aires va volant

帝王ワシが風を切ってとんでゆく

Cantant amb melodia,

抑揚よろしく歌いながら

Dient: Jesus es nat

鳥たちはつげる

Per treure'ns del pecat

「イエス様がお生まれだ」

I dar-nos alegria.

「我らを罪から救いたまひ喜びを与えたまうために」

(浜田滋郎訳)

【参考文献】  
・JM. コレドール著、佐藤良雄訳(1974)  
「カザルスとの対話」白水社  
・J.L. ウェッパ―編、池田香代子訳(1996)  
「パブロ・カザルス鳥の歌ちくま文庫」

【参考CD】  
・「The Art of Pablo Casals 1」  
SONY SRCR935566  
・「Angels' Eye」TOSHIBA EMITOCCE-55007  
・「スペインのロマンセ」  
ダウンドアンドカンパニイHAB-001

# アリカンテ、ペトレルより ―ホセ・トマス国際ギターコンクール―

## ビリングスリーノエル

7月6日スペイン南部、アリカンテ県にあるペトレルという小さな村に降り立ち、まず最初に感じたのは、スペイン独自の乾燥した空気でした。その日はホステルのオーナーであるホセに自転車で村を紹介してもらった。

7月7日この日は朝から自分の足で村の散策をし、スペイン南部特有

のイスラム教とキリスト教の入り交じるこの小さな村でその地の歴史に触れる事ができました。村のてっぺんに位置するペトレル城の入り口には小さな人だかりができていて、勇気を振り絞り挨拶をするときちょうどお城のガイド付きツアーが始まる時で、運良くそのツアーに参加させてもらい、さらに運が良かったのはそこにスペイン系アメリカ人がいてガイドの言うことを英語で説明して頂きました。

お城自体はイスラム系建造物で、たった80年前までお城の山に穴を掘り家を建てるお金が無い人々が洞窟で暮らしていたみたいです。下の写真で分かるようにイスラム系建造物の中にキリスト系の礼拝堂があります。

7月9日、この日はホセ・トマス国際ギターコンクールの第一次予選が行われ、僕も参加させて頂きました。結果は予選落ちとはなりませんが、自分の何がいけなかったのかがよくわかりました。初めての国際コンクールで、テクニクを見せる事に必死になりすぎ、自分の音楽ができなかったのが敗因であったと思います。参加者全員34名がここで10名に絞られる。他の国際コンクール優勝経験者も突破できなかったのだから、コンクールというのは時の運と



入賞者も落選。同夜、メインゲストの一人のロベルト・アウセルの演奏会が行われ、音が響き過ぎるのが残念でしたがアウセルから魔法のように出てくる音が教会を埋め尽くし、聴き手を完全に魅了しました。

というのがよくわかりました。

7月10日、異国滞在の醍醐味である（と思います）現地スーパーマーケットでの買い物を買ませ、第二次予選を聴きに行きました。リストを見ると世界中でコンクール荒しをしているギタリストの名前がぞろぞろ。去年からの eurosings とのコンラボレーションが始まったこともあり、賞金やツアー権を狙い世界中から集まるコンクールに成長したらしい。10名の中からほぼ予想通りの4名が選ばれ、ここでまた去年の東京国際第二位やアルハンブラ国際上位

7月12日、今日はマルコ・ソシアス氏によるマスタークラス。ソシアス氏の事は知りませんでした。今も亡くなったロドリゴとも面識があり、受講したヘネラリーフェのほりは彼にとつて特別な曲らしく、かなり濃いレッスンをしてくれました。まず指摘されたのが、自分で音楽を工夫しすぎていること。良いことともとれますが、曲の音楽自体が持っている美しさをそのまま出すには素直に弾くことも大事だと。このコメントは自分にとつて目からうろこ的



写真上/ペトレル城からの眺め  
写真右/ペトレル城までの古路  
写真左/礼拝堂

で、自分は今まで頑張りすぎていたのかなと考え直す機会になりました。

同日はホセ・トマス国際コンクールの本線があり、国際コンクール常連ギタリストの演奏を聴くことは自分にとって大きな刺激になりました。全員がかなりハイレベルな演奏を披露しましたが、結局1位はなく、2位がジュリア・バラレーという世界的にも注目が集まっている女流ギタリストという結果になりました。こ

のあとホテルに戻り他の参加者とのBBQパーティーがあり遅くまでギターについて語り合ったり、それぞれの国の話をしたりとか楽しい時間を過ごしました。

7月13日、この日は今回の旅のもう一つの目的である自分のギターの製作者であるピセンテ・カリージョ氏のワークショップに訪れました。色んなギターの試奏やギターのパーツそれぞれの木材を見せて頂いてと

ても興味深い体験でした。ギターがどうやって作られるのかを一から見せて貰いました。その後はラ・マンチャにあるワイナリーを訪れ、ワイン片手に採れたてのトマス、生ハム、チーズ、しめにパエリアも頂いて、言う事無しでした。

大変豊富です。長さは様々であり、黒いチステ（いわゆるブラック・ユーモア）や緑色のチステ（性的ユーモア）、知的なチステやナンセンスなチステ等があります。からかいのチステの場合は、女性が男性が冗談の性的になることもあれば、各地方や国の性格を馬鹿にするものもあります。政治、宗教、職場、恋愛、結婚、学校：あらゆることをテーマとして取り上げることが可能です。「自分の影までをあざ笑う」と言う表現があります。自分自身をあざげることが出来るのが、まるでスペイン人の美徳のようです。



## スペインのユーモア

琉球大学国際地域創造型学部 准教授

酒井アルベルト

「日本のお笑い番組は好きですか。」

日本に着いたばかりの頃、よく聞かれました。私は戸惑いを覚えながら「あまりテレビを観ないので分かりません」と妙に気を遣った返事を

していました。実は、お笑い番組をあまり「笑える」とは思っていないのです。芸人が言っている意味をちゃんと理解し、伝えたいユーモアもなんとなく悟っていても、自分の笑いのツボがすぐられることは稀でした。日本人の友達が熱心にその

面白さを説明してくれることもありましたが、かれらとて結局爆笑を共有してくれないに呆れながら、やはり国民性の問題だと結論付けて納得しかねなかつたことでしょう。

一見愚かな話のようですが、そのきっかけで日本とスペインのユーモアについて考えたことが多いのです。テレビ番組ではありませんが、スペインを最も代表するユーモア表現は「チステ (chiste)」であると思います。チステとは日本語の「笑話」に当たるのですが、その種類は

むろん「笑話」自体は世界共通のものではありませんが、スペインなishiten文化の生活には一層深く染み込んでいます。友達の集まりで誰かが何気なくチステを話し出した

ことをきっかけに、数時間も皆でチステを投げ合う結果になるのはよくある光景です。特定の種類のチステを専門にしたり、チステを通じて張り合いをしたりと、チステは自己の表現になり得るものなのです。さらに普段の会話の中でもチステを引用するのは決して珍しくないことから、チステは「民の知恵」の宝庫であると言っても過言ではありません。人気のあるお笑い番組も、結局はコメディアンがひたすらチステを話しているにすぎないのが多いです。まるで友達の集まりの延長かのように見えます。

しかし、こんなに多彩で豊かなチステ文化は「面白くない」とスペインを訪れる日本人にしばしば言われることがあります。私が当初、日本のお笑いに対して抱いていた気持ち

と全く同じです。そこで、言語能力や異文化の理解度の問題ではなく、共有する経験の問題だと思えました。現に来日してから数年後、私も日本のお笑いで「笑える」ようになったのですが、恐らく日本で生活してきて他の日本の市民と共有する経験が増えてきたことがその原因でしょう。ユーモアをこのように定義してみたらどうでしょうか「世の中の愚かさを示す目的で、ある社会の共通記憶を洗練して表現する行為」。

国籍を問わず、他の人間と共に笑う時間というのは、共謀して一時的に秩序を破壊する爽快な時間です。笑いが収まって秩序が回復されても、共に笑っていた人間の間に何かが残るに違いありません。今後も、偏見や先入観を捨てながら笑い続けられるような愚か者でいたいと思います。

# スペインの歌を楽しむ

## 服部洋一

スペイン歌曲の演奏に携わって、この世界の面白さは本当に尽きない！と感じることの1つに、テキストがスペイン語だけではないというところにもあると感じている。共通語であるカステイージャ語を通常日本ではスペイン語と呼ぶが、この他にもカタルーニャ語による歌曲群、例えば、エドゥアル・トルド

ラやフレデリク・モンポウらの芸術歌曲作品―真摯にして奥深い感動に満ち、地中海的な光と情熱に溢れつつも、汎欧州的・国際的色彩も兼ね備えた歌曲―その素晴らしさは、やはりカタルーニャ語で歌われなければ、真の味わいに触れることは難しい。

また、ガリシア語による歌曲は、我々にとって幸いなことに、20世紀スペインの音楽芸術世界に紹介し続け、また諸芸術家間の交流活性にも生涯を捧げた音楽評論家、アントニオ・フェルナンデス＝シッドに捧げられた『34のガリシアの歌』が存在している。これはガリシア文学史に名を刻む文学作家による詩もテクストとし、20世紀を代表するスペインの作曲家、音楽家たちからそれぞれ一曲ずつがシッドに献呈され編まれたアンソロジーである。各曲に込められたテーマは、ガリシアに住む

人々の質素な日常生活模様や風俗習慣、民間伝承されてきたのである。昔話や、巡礼の西方最果ての地、サントイアゴ・デ・コンポステーラに象徴される敬虔な信仰心や奇譚などにもわたり、少欲知足の人生観が歌と音楽を通してひたひたと心に迫る。

またスペインと、フランスに点在するバスク州の歌といえば、神父にして作曲家・音楽教育者であったパードレ・ドノステイアやオルガニストでもあったヘスス・グリーディ、我が恩師でバスク出身の、スペイン屈指のピアニスト、フェリクス・ラビージャの、バスク語による歌曲作品も、バスク民族の心情と、どこことなく無骨だがタフな生命力に溢れるバスクの響きを楽しませてくれる。

これだけでは終わらない、レコンキスタ運動の煽りを受けて、国外追放の身となった異教徒、ユダヤ教徒たち（セファルディム）が歌い継いだ古謡「セファルディーの歌」の数々は、古いカステイージャ語やヘブライ語とが交錯するテクストも持ち、中近東的な魔法とも相まって強烈なエスニックの芳香を放つてくれる。まだある。アメリカ大陸へと伝播したスペイン語文化は、とくに中南米において、元のカステイージャ語と

は発音もイントネーションも少し変容しつつ、根付き、ルネサンス・バロック期以降現代に至るまで、多くの中南米スペイン語による歌曲作品が生み出されてきた。一例をアルゼンチンであげれば、アルベルト・ヒナステラ、カルロス・グワスタビーノらは、秀逸な歌曲を生みだし、クラシック界ばかりでなく、アルゼンチン・タンゴのレジェンドとも言えるカルロス・ガルデルの名曲の数々も底知れぬ魅力に富み、このスペインの歌の世界を実に彩り豊かなものにしてきている。これら全ての魅力も歌い尽くすには人の一生はあまりにも短いと感じるほどである。

## スペインと私

### 鳥袋紀子

「面白い本があるよ」と友人に勧められて読んだパウロ・コエリョの「アルケミスト」。羊飼いの若者が不思議な夢を見、聖人との出会いをきっかけに自分の夢への旅に出る。普段あまり本を読まない私が一晩で読み終え、すぐさま旅に出かけたくなるほどワクワクしたので覚えておく。今でも日々の生活にマンネリ感を覚えるころに読み返すと、人生の楽しみ方を思い出させてくれる。そこからブラジル人の著者に興味を持ち、著者の体験をもとに書かれた処女作「星の巡礼」でサンチャゴの巡礼路が実在し、またそれがスペインにあることを知った。摩訶不思議体験が好きな私は「いつか行ってみたいなあ」と心の片隅で思っていた。

同時に、体力づくりにと軽い気持ちで始めたフラメンコ舞踊。友人から頂いた本をきっかけにこの芸術の奥深さを知り、インターネットや本で情報を探し集め、ライブやレッスンがあればどこへでも飛んでいき、家事・仕事以外はほとんどフラメンコに時間を割いていた。海外に住んでみたいという私の行き先もいつの間にか英語圏からスペインに変わっていった。

必ずある古い聖堂や聖人の像、人々がどのように生きてきたのかを目の当たりにしたおかげでほんの少しだけ想像できるようになったと思う。その4年後、子育てもひと段落し、多くの人に支えられて私は今フラメンコのメッカとも言えるセビリアで留学2年目を過ごしている。日本人のフラメンコ愛は現地でも有名で、実際に多くの日本人がフラメンコを学びにアンダルシア地方に来ている。なぜフラメンコが好きなのか、スペイン人に聞かれることがある。「哀愁漂うメロディーが演歌や民謡と似ているんだよ」「表にはあまり出さないけど日本人だって感情の起伏の激しさは同じ、フラメンコはそれを表現してくれる」と大体答えているが、日本のアンダルシアとも言える沖縄との共通点も多い。人懐っこく、のんびり屋さんでマイペース。お祭り好き。私だって、エイサーの太鼓が聞こえるところとちむどんどんして思わず囃子が出てくる。そんな郷土愛でアンダルシアにもフラメンコがあるのではないかと思っている。

そして2014年。サンチャゴの巡礼路・フランス人の道約800kmを歩くことができた。当初フラメンコのレッスンを約2か月お休みすることには不安を感じていたのだが、カステイリア地方の広大な平地をひとり体力の限界まで歩き、自分自身と向き合う時間を持ったことで自分の中にあつたコンプレックスが吹っ切れた。フラメンコの歌詞によく出てくる描写も、どんな小さな街にも

サンチャゴ巡礼路、フラメンコ。私の中でこれらは全くの別物で、両方がスペインであることは全くの偶然だった。ユーラシア大陸の東の果て遠く離れた国から、大陸の一番西の国へ。「アルケミスト」の物語にあつたように、私も夢の宝物を見つけられたらと思う。

# Magia y Sueños en El Camino エル・カミーノでの魅力と夢

エドアルド・エインリッヒ・サンチェス・ゴメス

En mayo pude hacer los 119 km del Camino Inglés, que empieza en Ferrol y llega hasta Santiago de Compostela. A los miembros de la SEO les quisiera presentar algunos lugares y personas de interés que conocí en dicho Camino Inglés. Hice el Camino para marcar un nuevo rumbo en mi vida personal y profesional. A la vez tomé la oportunidad para visitar por primera vez la tumba de mi abuelo en su pueblo natal, Cariño.

5 月にはフェルロールからサンティアゴ・デ・コンポステーラまでの 119km のエル・カミーノ（巡礼）・イングレス（コルーニャとフェロルをスタートポイントとするイギリス人の道。伝統的にサンティアゴに向かう途中、北ヨーロッパ、イギリス、アイルランドの巡礼者が辿ったルートである訳者注）を行うことができましたので、SEO の皆さんに、エル・カミーノ・イングレスで会った興味深い場所や人々を紹介したいと思います。私は個人的に、また職業的な生活の中で新たな方向性を示すために巡礼しました。そして、初めて、カリーニョという私の祖父の故郷で、祖父の墓を訪れました。

También pude conocer a mi familia en Galicia. Entre los abrazos, besos, rica comida, pan y vino, mi familia me preparó para el Camino. Con cada paso, en mí fue despertando mi ADN materno. Con cada paso, con cada abrazo de verde y bosque, con cada copa de Ribeiro fue despertando en mí un sueño que casi olvidaba. Los recuerdos de estar con mi abuelo en los EEUU escuchando un cassette de gaitas y tambores mientras mi abuela nos preparaba el pulpo. Los cuentos de los tíos y tías entre Galicia y Cuba. Ya llegué al escenario donde nació la historia de mi familia. También cambié España, de Rajoy a Sánchez.

また、ガリシアでは私の家族と会うこともできました。懐かしい再会をして、家族は美味しい食事、パン、ワインを私の巡礼のために用意してくれました。歩くたびに私の母親の DNA が私の中で目覚めていました。



歩くたびに、緑と森に抱かれるたびに、リベイロを飲むたびに、私が忘れていた私の夢のなかで、その DNA を覚醒させました。私の祖母がタコを準備している間、アメリカで私の祖父と一緒にバグパイブとドラムのカセットを聞いていることの思い出。ガリシアとキューバの間



の叔父と叔母の話。私はすでに私の家族の話が生まれた場所に着きました。スペインはラホイからサンチェスに代わりました(2018年6月1日、ラホイ政権は崩壊、翌6月2日にサンチェスが首相に就任した訳者注)

En cada taberna, en cada bodegón y restaurante que me daban el sello de peregrino, me quedaba horas disfrutando de ser testigo de este punto histórico. Quiero ir otra vez. Cada uno hace el Camino por muchas razones. Un camino para reflexionar y otros por turismo o razones de fe. Para mí, fueron todas y más.

私は、すべての居酒屋、巡礼者の切手をくれた飲み屋とレストランで、歴史を見て楽しんでいました。もう一度行きたいと思います。反省や観光や信仰の理由のための巡礼というように、誰もが多くの理由で巡礼をしています。私にとっては、もっと沢山のものがありました。

Quisiera empezar en Okinawa un Camino en forma de 8 con el punto medio en Ishikawa.

Algún día espero poder viajar a Galicia con mi familia y amigos de Okinawa. Antes de que pase mucho tiempo me imagino que mi familia en Galicia pueda visitar Okinawa.

¡Buen Camino!

Eduardo Heinrich Sánchez Gómez

沖縄で石川の midpoint と無限の方法で始めたいと思います。いつか家族や沖縄の友人たちとガリシアを旅行したいと思います。そして、ガリシアの私の家族が、沖縄を訪れる日は早く来ることでしょう。

良い巡礼になりますように！

エドアルド・エインリッヒ・サンチェス・ゴメス

# El Vito/ホル・ゴートの多様性と魅力 — スペイン・アンダルシア地方の民謡と踊り —

大城英明

先日、沖縄スペイン協会の主催するコンサートにて出演する機会を頂き、その折にマヌエル・インファンテ

を比較対照しやすい興味深い例となっています。

(1883-1958)のエル・ビート演奏しました。エル・ビートとは、アンダルシア地方に伝わる民謡で、その音楽は、私たちがイメージするスペインを彷彿とさせ、情熱的で抑揚に富んだ曲調になっています。多くの芸術家はこの旋律にインスピレーションを受け、スペイン人作曲家を中心に広く引用されてきました。

ピアノ作品として、今回演奏しましたインファンテのエル・ビートは、2台ピアノ版から彼自身によるピアノ独奏版で、テーマが変奏を繰り返す度に即興性を増し、ギター風伴奏を伴って、ピアノスティックな作品へと展開されます。この作品と並び、インファンテと親交のあったピアノのホセ・イトウルビ(1895-1980)の、より自由に編曲された版も存在しています。その他、ギター作品へのアレンジに加え、フラメンコの分野では多くの舞踏家たちが、この民謡をよりどころにオリジナリティーあふれる創作活動をしています。

エル・ビートの起源は16世紀頃より歌い継がれてきたとされますが、19世紀に入ると、二人の作曲家、フェルナンド・オブラドルス(1897-1945)の「スペイン古典歌曲集」そしてホアキン・ニン(1879-1949)の「20のスペインの歌」により、ピアノ伴奏付きの独唱曲へ編纂されることになりました。旋律はそのままに、同旋律を支える伴奏形の書法が異なることで、作曲家の視点や音楽の味付け

沖繩にも世代を超えて昔より歌い継がれている民謡が数多く存在しますが、そこには、ナシヨナリズムに代表される様に、民族の誇りやアイデンティティを作品に感じ取ることができます。これらを代表する作品の一つ、エル・ビートが様々なジャンルで作曲されることにより、音楽の多面的な表情を発見していく楽しみが魅力になっていると思います。

## La Cocina Española

### スペインの豆料理

スペインの市場の乾物屋さんには、様々な種類の豆が並んでいてその多さに驚かされます。レンズ豆、白花豆、うずら豆…日本では見たことのない豆も。その豆を野菜や魚や肉と煮込めば、温かくてボリュームのある主役のおかずになります。

写真はレンズ豆。沖縄のスーチカ(塩豚)とチョリソを合わせて煮込みました。

玉ねぎの薄切りとにんにくをオリーブ油いため少し色づいてきたらパブリカ粉を少々。スープストックを入れ肉類とローリエ、クローブを加え豆が柔らかくなるまで煮込みます。

豚肉は初めに別に茹でておきます。チョリソが手に入らない場合塩豚だけでも十分美味しいしハムやベーコンを加えても。野菜はじゃが芋はもちろん人参を入れても美味しいです。最後に塩で味を整えて出来上がり。

レンズ豆は前の晩から水に浸けたりしなくていいし煮込む時間も短いので、思い立った時に作れるのが便利です。これから寒い季節、食卓にあつあつの豆料理はいかがでしょう。



**Bar Español Las Tres Ramas**  
スペインバル トレスラマス  
内山三枝

### ■2019 年例会スケジュール

- |       |                       |        |                                     |
|-------|-----------------------|--------|-------------------------------------|
| 2月24日 | ピアノコンサート「トゥリーナとピアソラ」  | 7月27日  | 「ラテンピアノデュオ」(予定)                     |
| 4月14日 | 「みんなでセビジャーナスを踊ろう」(予定) | 10月27日 | 「ルネッサンスとバロックの歌」(予定)                 |
| 6月14日 | 「スペイン料理講座」            | 12月1日  | 「サンティアゴ巡礼の話とヴァイオリンによるスペインのひととき」(予定) |